

【出会い】

上質なソファにテーブル。美しいティーカップに注がれた紅茶。

女は白絹の夜着に身を包み、その上から薄いガウンを羽織った姿で、柔らかなクッションに身を委ね、目の前の紅茶が静かに冷めてゆくのを眺めていた。

女の名前はエレノア・フォン・アルヴィス。

悪名高いアルヴィス家の長女で、フェルディア王国の王太子の婚約者であつた——日前までは。

※

「エレノア、君との婚約を破棄する！」

愛しの婚約者サマから告げられたそれは、華やかな夜会の場でよく響いた。

突然のスキャンダルにざわめく貴族たち。婚約者サマの腕に抱かれ、こちらを氣遣わしげに見る「完全に初対面の令嬢」が視界に入ったエレノアは、思わず天を仰ぎたくなった。

「エレノアの行った数々の悪行」をつらつらと並びたてる王太子の言葉を背景に、エレノアは己の不運を嘆きながら、心の中で神を恨まずにはいられなかった。

「（これは『呪い』が発動したわね……）」

エレノアは呪われている。正確には、「アルヴィス家が呪われている」というのが正しいけれど。

——遙か昔、この国の大地を守護する大精霊の怒りに触れた祖先は、恐ろしい呪いを受けたらしい。

その呪いは命を奪うものではなく、また富を奪うものでも、力を奪うものでもなかった。

それは誰からも愛されぬよう、運命を歪める呪い。

我が一族が口にする言葉は、たとえ善意から発せられたものであろうとも、相手には悪意あるものとして届く。

慈しみの行動は傲慢に。忠告は侮辱に。心配は支配欲に変わってしまう……らしい。

エレノアは目の前の令嬢とは完璧に初対面であるはずなのだが、どうや

らいじめにいじめ抜いて殺人一歩手前位までいったらしい。ついでに国家転覆未遂もやったらしい。ついでになってなんだ。本気で心当たりが無い。

エレノアは至って普通に過ごしていた筈なのだが、どんなエキセントリックな思考回路をしていれば殺人未遂からの国家転覆未遂をキメたように見えるのだろうか。

……まあ、確かに？お世辞にも「穏やかそう」とは言えない容姿をしている事はエレノアだって自覚している。

父親譲りのキツイ目元は睨んでいると誤解され易いだろうし、高めの

身長と合わさって冷たい印象を持たれがちだ。「アルヴィス家の呪い」もあって、口から出る言葉は全てキツめに変換される。

一時期は人間をペットにするのが趣味だとか、生娘の生き血で美しさを得ているだとか噂が出回ったが、もちろん全てデマだ。あたりまえだろう。

そもそもエレノアの趣味は編み物だし、美しさを得るのなら生き血よりも健康的な食事だ。アルヴィス家の優秀なコックの作る素晴らしい料理とたっぷりの睡眠、それと適度な運動がエレノアの美を支えている。

「——君は公爵家という後ろ盾を利用し、私の判断に介入し続けた！」

目の前の王太子サマが更に自分をボロカスにこき下ろすフェーズに入っただのを「よく息が持つなあ」とぼんやりした感想を抱きながら、エレノアは婚約者の言葉を黙って聞いていた。呪いのせいで発する言葉全てがキツめに変換されてしまうエレノアだが、本来の気質はボケーンとした、少々ズレた娘だった。

……アルヴィス家には、先祖の呪いだけでなく、代々受け継がれる言葉がある。

「大いなる流れには逆らうな。災いの時こそ口を閉ざし、微笑みを絶やすな。されば人は意味を見出し、事は己の知らぬところで収まる」

要するに、「長い物には巻かれとけ。トラブルがあっても黙って笑っ
けばどうにかなるから」という意味だ。

先祖の受けた呪いのせいで多方面から嫌われまくっているアルヴィ
ス家だが、大精霊の慈悲かなんだか知らないが直接的な害が及んだ事は
一度も無い。

エレノアの父も出先でしょっちゅう襲われたり暗殺されかけるが、毎
度奇跡的なタイミングで回避しては怪我ひとつ無く帰ってくる。あまり
にもピンピンしているものだから、小さな頃は帰宅する度に父の冒険譚

のような危機一髪話をよくせがんだものだ。

今は亡き祖父も、乗る馬車が尽く事故にあったり、政敵である貴族に陥れられたりしたが、アルヴィス家は一度も傾く事なく、高齢の祖父は病氣ひとつせずに自宅のベッドの上で眠るように亡くなった。

どんなに周囲から悪意を向けられたとしても、アルヴィス家の者は必ず老衰で死ぬらしい。変な呪いである。

そんなこんなでエレノアは家訓の通りに、黙って長い物に巻かれていくのだ。

「……エレノア！聞いているのか！？」

どうやら断罪パートは終わっただけらしい。

ぜえはあと肩で息をしながら呼びかける婚約者——フェルディア王国の王太子であるフェリクス様へ微笑みかければキッと睨まれた。まあ、こわい顔。

「承知いたしました」

「……何？」

フェリクスがわずかに眉を動かす。

親同士が決めた（と言っても、国王からの一方的なものだ）婚約だった

が、愛はなくとも情はそれなりにあった。婚約が決まってから今の今まで、共に国を支えようと、良きビジネスパートナーであろうと努力はしてきたつもりだ。

その努力が実らないのは残念に思うが、エレノアは目の前の婚約者をちっとも恨んではいなかった。

こんな事になってしまったのは、主にアルヴィス家のクソツタレな呪いのせいなので。

「婚約破棄を受け入れます」

エレノアは深く礼をした。

フェリクスとは「10年ほどの付き合いだったので言いたい事は沢山あったが、全部のみこんでとびきり丁寧に礼をした。周囲の貴族のざわめきが聞こえる。」

エレノアはこの先の自分の行く末を案じながらも、「呪いがある限りそう悪いことにはならないだろう」と、どこか他人事のように考えていた。

※

美しく装飾されたティーカップのふちを指でなぞり、中身を一口飲む。完璧に冷めきっていたが、味は恐ろしく美味であった。

エレノアはほう、と息をつく。婚約破棄をされてから今の今まで、色々な事がありすぎてろくに休めていなかったのだ。

「——エレノア・フォン・アルヴィス」

静かな部屋に、突然男の声が響く。ビク、とエレノアの肩が跳ねて、カップから零れた紅茶が指先をわずかに濡らした。

声のした方を見やれば、威圧感のある巨軀の男が扉の前に立っていた。いつ入ってきたのだろう、全く気が付かなかった。

カツカツと靴音を鳴らしながらこちらへ近づいてくる男の深紅の髪

が。燭台の灯を受けて鈍く輝いている。

エレノアは、ドクドクと脈打つ心臓を抑えながら、何とか平静を装って口を開いた。

「レオンハルト、様」

つまらなさそうな顔でエレノアを見下ろす男の名は、レオンハルト・フォン・ヴァルデア。他国から魔界、蛮族の国と擲擧される、ヴァルガデア帝国の王であり——今はエレノアの、夫である。

そう、夫。旦那様だ。5日前に婚約破棄されたエレノアは、一週間も経たないうちに激ヤバと噂される国の王様の元へ嫁ぐ事になったのだ。

とんでもないスピード感である。

「実はレオンハルト様は私の事が好きで、婚約破棄直後にプロポーズされて……♡」なんてベツタバタなロマンス小説のような展開では断じてない。政治的理由100パーセントの面白みの欠片もない結婚だ。

ここまでの経緯について簡単に説明しよう。

エレノアの祖国であるフェルディア王国の隣に、ヴァルガデア帝国という時限爆弾みたいな激ヤバのデカイ国があった。

この国、世襲制ではなく、王冠争奪戦という名の王座を賭けたバトルロワイヤルで王を決めており、さらに国力がずば抜けて高いものだから、周辺国は血の気の多い王のご機嫌をとるために胃を痛めながら外交を

行っていた。

そんな激ヤバ国の、比較的胃に優しくった王が何年前に敗れた。敗れてしまった。次代の王は戦好きらしく、隣国に次々と戦争をふっかけ、どんどん支配下に置いていった。ヴァルガディアはいつほどお隣の国だったのが、気づけばフェルディア王国の真隣にいた。怖すぎ。

フェルディア王国は懇願した。「どうか戦争だけは止めてくれないか。望むものはなるべく渡すから、このまま静かに暮らさせてくれ」と。

ヴァルガディアの王は言った。「ならば金と、技術と、女を一人、妻として迎えたい。女はとびきりの悪女が良い。罪人だとしても構わない」

と。

フェルディア王国はたつぷりの金と、各分野のとびきりの技術者を用意した。後は女だけだ、というところで、ちょうど婚約破棄されたエレノアに白羽の矢がたったのだ。

なんてったってエレノアは殺人未遂○に国家転覆未遂○をキメた大罪人である。しかも悪名高いアルヴィス家の娘なのだから、ヴァルガディアの王のへんてこな条件を十分に満たしていると言える。

そんなわけでエレノアは婚約破棄から数日後に結婚相手が決まり、今朝ヴァルガディア帝国に着いたと思ったらウェディングドレスを着せ

られ、何が何だか分からないうちに結婚式が終わり、そして今は……い
わゆる初夜である。

「稀代の悪女だと聞いて楽しみにしていたが……蓋を開けてみればど
うだ、か弱い野うさぎのようだ」

レオンハルトはエレノアの隣に腰掛け、彼女の持っていたティーカッ
プを奪い、中身を飲み干す。

そして口の端からツ、とたれた分を乱暴に拭き取り、男の威圧感で動
けないでいるエレノアの顎を掴んで無理矢理目を合わせた。

「っ……！」

「フェルディア王国はお前を俺に売って、お前は俺の所有物になった。だから俺はお前に何したって良いし、殺したって良い。俺のものだからな。わかるか？」

「……ええ、」

目の前の緋色の瞳がじろりと動き、エレノアの顔を無感動に観察する。顎から首へと手のひらが移動し、獅子がいたずらに獲物を弄ぶように、ぎゅ、きゅう、と氣道が圧迫される。

エレノアは恐怖で泣きたくなってきた。話が違う。アルヴィス家の呪いは命は奪わないんじゃないやなかったのか。幼い頃ねだった父の刺激的な日

常話では、こんな直接的に害されることは無かったのに。

じわりと視界が歪む。エレノアは産まれてから今まで真面目に生きてきたというのに、どうしてこんな目に合わないといけないのか。

「お前は身一つでここに来た。この部屋から出て誰かに助けを求めようとも、この国にはお前の味方なんざいない。俺が王で、俺がルールだ。お前は俺の言うことを聞く義務がある。生きていたいならな」

「う……」

「返事は？」

「は、い」

「よし」

エレノアの首を絞めていた手がパッと離れ、新鮮な空気が気道を通る。「かふ、こほ」と小さく咳をしながら、少しでもレオンハルトから距離をとろうと後ずさるエレノアの膝に、ポンと何かが置かれた。

鞭である。

黒々とした革で編まれた、重みのある一本鞭がエレノアの膝の上に鎮座していた。

「……は、？」

エレノアは頭が真っ白になった。これは……なんだ？上質な革で編まれたそれは、照明をうけてぬらりと光っている。しなやかな革製のその先は平べったくなっている。……これは鞭、なのか？エレノアは乗馬用のものしか知らないが、これは随分と形が異なっているような気がする。しかし何故今、こんなものが？

さらに不思議なのは、レオンハルトが鞭？の持ち手？らしき所をエレノアに持たせようとしている事だ。

突然の事に動けないでいるエレノアの手に鞭？をぎゅつと握らせたレオンハルトは、相変わらずの感情の読めない顔のまま、エレノアの目を

見て言った。

「よし、この鞭で俺をぶってしろ。できないなら殺す」

エレノアは手元の鞭を見て、レオンハルトの顔を見る。能面のような顔が、心做しかワクワクしてるようにもみえた。エレノアは言われた事をなんとか理解しようと、必死に脳をフル回転させる。

「い、」

「い？」

「イカれてますわーーーーッッ！！！！」

エレノアの渾身の叫びが室内に響き渡る。淑女教育によって培われた見事な腹式呼吸。鍛え抜かれた肺活量から放たれたその声は、空気そのものをビリビリと震わせるかのように感じられるほどの迫力だった。

「『この鞭で俺をぶってみる。できないなら殺す』！？バイオレンス・オア・デッドですわ！！『俺をぶってみる』と『殺す』の単語が共存することってありますの！！！？？」

「なんだ、嫌か？なら殺そうか」

「『なら殺そうか』！！！？？わたくしどの立場で鞭を振るえばよろしいんですの！！！？？殺さないでと怯え泣きながら『できないなら殺す』と

脅す加害者に鞭をふるえと!!??」

「その場合の加害者はお前だな」

「わたくしが加害者ですわーーーーッッ!!!」

「はは、」

エレノアは恐怖が頂点に達してどうにかなってしまい、もう自分が何を喋っているのかも自覚できずにいた。

普段ならば呪いのせいで、「自動的に変換されるはずの言葉」が垂れ流しになっているのに気づかない。

口元を緩めて笑うレオンハルトを見て、「イカれ野郎ですわ……」と呟

くエレノア。さらに笑みを深めるレオンハルト。室内は混沌を極めていた。

「鞭はまだ難しいか？ならその手で俺の頬を張れ。殴ってもいいぞ」

「い、嫌ですわ！」

「ならお前が死ぬか？」

「会話が蛮族すぎますわ！！この国は王族にどんな教育をしているんですの！！??？」

「俺は平民出身だが」

「そうでしたわ……」

そうだった。ヴァルガディア帝国は王冠争奪戦という名のバトルロワイヤル形式で王が決まるのだ。つまり目の前の男は王族でもなんでもなく、ただの『チキチキ！勝ち抜き王様バトル』の優勝者なのだ。貴族の常識なんぞ通用しないのである。

いっぱい叫んで少し落ち着いたエレノアは、己が嫁いだヴァルガディア帝国について思考を巡らす。

「ヴァルガディアは不思議な国ですわね。王族の教育も無しに、どうやって運営しているのかしら」

「それは……この魔道具があるからだ」

レオンハルトは右手に嵌った指輪を見せる。黒い金属で出来た太めのリングは繊細な彫刻がなされており、トップには深緑色の石が埋め込まれていた。

「この指輪は意志を持っている。ヴァルガディアの王以外は身につけることができない。この指輪に『知識』があるから、俺みたいな平民でも王冠争奪戦で勝ち抜けさえすれば王としての振る舞いができる。ヴァルガディアにとって、王は強さのシンボルだ。細かいところの運営は、他のキチンと教育されたやつがやる」

「なるほど。それなら貴方みたいな人でも務まりそうですわね」
「王冠争奪戦で頂点に立つやつなんぞ、全員似たようなものだ」

「……全員が貴方のように、ぶたれるのを好む、と……??」

「そうだな」

「そうだな!!!??」

エレノアは再び混乱した。あれ程周辺国から恐れられている激ヤバ帝国の王達が、まさかの全員被虐待趣味持ちである。

力で王座を勝ち取った者たちが、最終的に求めるものがソレなのか。それでいいのかヴァルガディア帝国。

「あ、えっと……ぶたれるのを好むから、みな嬉々として王座を狙う、ということ?」

エレノアはいっぱいいっぱいになりながら、なんとかレオンハルトの爆弾発言を理解しようとした。

しかしそんなエレノアの努力も虚しく、レオンハルトは首を横に振った。

「違う。王になった者がそうなる」

「どういうことですの……」

「俺の場合は、そうだな……俺は戦いが好きだ。王冠争奪戦に参加する奴らもそうだ。手練の相手に挑戦して、負けて……次こそは勝つと意気込んでいる間は楽しかった。だが、実際に勝ち抜いてしまえばどうだ。

王座なんて空虚なものだ。周りは全員俺以下で、俺の目指すべき目標なんてない。……張り合いが無い」

「……」

「そんな灰色の日々の中、俺は一つの部屋を見つけた。王の指輪を持つ者しか入れない、いわば歴代の王達の私室だ。そこには王達が愛した武器や絵画、宝飾品に書物……そして先代達の残した記録があった」

レオンハルトはエレノアの顔から視線を落とし、ぎゅうと鞭を握りこんでいた彼女の手にふれ、その輪郭をいたずらになぞる。その手つきに、先ほど首を絞められたことを思い出し、ゾワリとした不快感がエレノアの背筋を走った。

「俺はその記録を見た。先代の王は俺が打ち負かしたが、それより前はもつとずっと強かったかもしれない。未知の戦術や武器だとかが書かれていると期待して中身を見たんだ」

「ま、まさか」

「内容は、被虐趣味についてだった。俺は心底ガツカリした。俺が憧れた、国の頂点に君臨した者達はみな痛めつけられるのが好きと来たもんだ。失望すらした。そして何故自分の性生活の記録を、わざわざ劣化防止の術を施してまで後世に残すのかと。……腹立たしいことに、その記録は初代の王からあった。俺はムキになって全部目を通したさ。『何か有益な情報は無いのか』とな」

「無いに決まってるよ……」

「だが、俺は気付いたんだ」

「嫌な予感がしますわ」

「自分よりもはるかに弱いものからの痛みを甘んじて受け入れるのは、最も強者らしい行為ではないか？」と」

「わあ……」

「きっと先代の王達もこの心理に気づき、実践しては、次代の王が頂点に立ったことで腑抜けてしまわぬように記録を続けたのだろう……俺が強者であり続けるための方法が、そこにはあったんだ……！」

レオンハルトはパツと視線を上げ、エレノアの青い瞳を見つめる。緋

色の双眸はきゆうと愉しげに細められていた。部屋は適温に保たれているはずなのに、エレノアはさつきから鳥肌がたちっぱなしである。こめかみ付近を汗が垂れていく感覚もあった。『体温調節機能が壊れてしまったのかもしれない……』と、エレノアはそんな馬鹿げたことを考えて現実から目を逸らした。

だがレオンハルトは止まらない。

「考えてみる。少し力加減を間違えれば壊れてしまうような、お前みたいな弱い人間から殴られるとする。普通だったら頭にきて、殴り返すだろう？だが、あえて俺はその痛みを受け入れる。俺のような強者が、抵抗することもなく、だ。弱者が与える痛みすら許容し、受け入れる……

…これは強者にしかできないことだろうか？」

「そう……ですわね……？」

「だがここで一つ問題がある」

「なんですの」

「俺はヴァルガディア帝国の王だ」

「そうですね。国のトップですわ」

「ヴァルガディアの王は、強さそのものを体現する存在だ。そんな王が弱者から痛めつけられている、という構図は……いささか問題がある」

「ああ……」

「そこでいつでも口封じができる、お前のような存在が必要になる。歴代の王達はそのような者達を妻として迎えていた。だから俺はお前を娶

った。理解できたか？」

「え、ええ……」

「よし」

そうやってひとつ頷いたかと思うと、レオンハルトはエレノアの手首を掴み、自分の顔の前へと持ち上げた。

「じゃあ俺をぶってみろ。できないなら殺す」

「イカれてますわ……」

エレノアは泣きたくなった。結局のところ、状況は何ひとつ改善して

いない。エレノアの生殺与奪の権利は相変わらずレオンハルトが握っているし、エレノアはそれを盾に、目の前の男に暴力をふるうよう迫られている。なんだこれ、悪夢か？

エレノアは涙を滲ませながらウンウン考えた。

フェルディア王国にいた頃は呪いのせいで周囲から冷徹な悪女として名を馳せていたが、本来の気質はぼんやりとした穏やかな娘である。将来的にレオンハルトに言いくるめられて鞭をふるう事になるだろうが、今はできる限り抵抗したかった。

「ぼ、暴力以外で何かないんですの？」

「暴力が嫌なら、精神的に痛めつける方になるな」

「精神的に、とは」

「そうだな……首輪をつけて犬のように扱ったり、四つん這いにさせた上に座って椅子として使ったり、あとは……」

「何故そんなことを……!」

「なんだ? もう一度説明が必要か?」

「い、いいえ……結構ですわ……」

エレノアは手元の鞭と、掴まれた手首を見てから、きゅっと口を引き結ぶ。肉体と比べて、精神を痛めつける方がややハードルが低そうに思えた。

エレノアは覚悟を決めてレオンハルトに命令する。

「ゆ、床に座っていただけますかしら」

「……ああ」

レオンハルトは愉しげに口を歪ませながら、ソファから降り、両足を畳むようにしてエレノアの足元に座り込んだ。エレノアは自らの足を持ち上げて、少し迷ってから靴を脱いだ。夜着に合わせた絹の室内履きだ。そして素足をレオンハルトの太ももの上にそっとのせてから、目の前の男の様子を見て……エレノアは恐怖で背筋が凍りついた。レオンハルトが瞳孔ガン開きでエレノアの足を見つめていたからだ。

「……これは？」

「あ、足置きにしていますわ」

レオンハルトの声が硬い。エレノアの頭で出力できる精一杯の屈辱的な行為だったが、目の前の男にとってはヌルすぎて気に入らなかったのかもしれない。

『ここからどうしよう』と冷や汗をかき続けるエレノア。暫く動けないでいると、目の前の男が足首を掴んで、その形を検分するかのように触れ始めた。エレノアは慌てて止めようとして、ちよつと考えてからレオンハルトの頭を引き寄せて、その頬をぺち、と叩いた。

「あ、足置きが勝手に触らないでくださいませ」

「……」

沈黙が部屋を支配する。

あ、殺されるかも。エレノアは直感的にそう思った。頑張って精神的に痛めつけようと捻り出した言葉だったが、悪手だったかもしれない。男の頭を引き寄せた手がじんわり汗をかいてきた。殺されるなら痛くない方法がいいな、とエレノアは男の眉間あたりを見つめながら考える。

「ふは、は……そうか。そうか、なるほど……」

レオンハルトは何かを噛み締めるように呟いた後、頬を叩いたエレノアの手首をガッツチリ掴んだ。「ひい、」とかぼそい悲鳴が喉奥から零れる。

「及第点とまではいかないが、中々筋は良かった。知識を入れればさらに良くなるだろうな……」

「た、たすかりましたわ……!!」

「それにしても、あの力の無さはどうにかならないか？羽虫が止まったのかと思ったぞ。1回全力でやってみろ。ほら」

「あれが精一杯ですわ!!」

「チツ、そんな訳無いだろう……まず、お前は叩き方がなってない。もつと振りかぶれ。勢いをつけろ」

「う、うう……！」

ペチツ、と先程よりやや強めに鳴った音に、男は不満たつぷりに息を吐いた。

「ハァー……いいか？俺は忙しいんだ。この後執務室に戻って書類を片付けなくちゃいけない。ほぼ確定された書類にハンコを押すだけの退屈な事務作業だ。考えるだけでも憂鬱になるな……そんな旦那様が気持ちよくオシゴトをする為に、お前がすることはなんだ？」

「こ、紅茶をいれたり……」

「違う。俺を鞭でぶつことだ」

「話が違いましてよ！！平手打ちで良いって言いましたわ！」

「あんなものが平手打ちに入るわけないだろう」

「うぐ……そもそも、仕事の息抜きに鞭でぶたれにくるだなんて非常識でしてよ！皮膚は腫れますし、最悪血だってでます……王がわざと暴力を受けたと一目で分かってしまいますわ！」

「ここは蛮族の国ヴァルガディアだぞ。その場で治癒すれば解決だろう」
「その名前は自称するようなものでは無くてよ……！！」

レオンハルトが鞭の持ち手を握らせようとするのを、必死に拒否するエ

レノア。

魔界、蜚族の国と呼ばれ恐れられているヴァルガディア帝国の城の中の、夫婦の寝室で起こった小競り合いは数十分にも及んだ。

どちらの要求が通ったかは本人達のみぞ知るが——側近曰く、「王はたいそう上機嫌で仕事をされていた」そうだ。

【初夜】

上質なソファにテーブル。美しいティーカップに注がれた紅茶。

女は白絹の夜着に身を包み、その上から薄いガウンを羽織った姿で、柔らかなクッションに身を委ね、目の前の紅茶が静かに冷めてゆくのを

眺めていた。

女の名前はエレノア・フォン・ヴァルデア。

一族の呪いのせいもあり、祖国では稀代の悪女として名を馳せていたエレノアだったが——今はヴァルガデア帝国の王妃として、この国で生きている。

「エレノア！」

ガチャ、と扉を開け、勢いよく入室してきたこの男——レオンハルト・フォン・ヴァルデア。

彼はヴァルガディア帝国の国王であり、エレノアの旦那様だ。現在進行形でエレノアの頭を悩ませている存在でもある。

愉しそうに口元を歪めながらエレノアを呼んだ男は、同じソファに腰掛け、手に持った謎の箱をティーカップの横にコトンと置いた。

「レオンハルト様……その、随分楽しそうですわね」

「はは、わかるか？」

「ええ、まあ……はい」

エレノアは歯切れ悪く返しながら、『この男の機嫌がこんなに良いのは珍しいな』と、不思議に思った。

いつもの……という程付き合いは長くないが、よく見るレオンハルトの表情のは無表情か仏頂面が基本だった。明確に笑顔を見せたのは結婚初日の夜だけで——と、そこまで考えた時、エレノアの背筋に冷たいものが走った。

「……また、この後仕事に戻られますの？」

「いいや？ 今日はまだもう店じまいだ。あとは寝るだけ……と、言いたいたいところだが」

「が？」

「ひとつやりたい事があってな。エレノア、手伝ってくれるよな？」

「え、ええ……」

「はは、いい子だ」

レオンハルトは褒めるようにエレノアの頬を撫でた後、ティーカップの横に置かれた謎の小箱を手にとり、中身を取り出してみせる。

照明の光をきらきらと反射するそれは、シルバーで作られたブレスレット……の、ように見える。

エレノアは拍子抜けした。てっきりあの日の夜のように、目の前の男を痛めつける為の何かが出てくるのかと思ったからだ。ほう、と細く息を吐いて、レオンハルトの手の中にあるブレスレットを見つめる。

銀色のチェーンで作られたそれは、所々に紫色の石が付いていた。デザインも上品で可愛い。

わざわざエレノアに見せてきたということは、プレゼントなのだろうか？レオンハルトにそういう情緒があるようには見えないが……新妻に一つくらい物を贈れと、周囲に言われたのかもしれない。

「これは王のみが入れる私室で見つけた魔道具だ」

エレノアは全身に冷や汗が滲むのを感じた。

王のみが入れる私室——それはレオンハルトが被虐趣味に目覚めるきっかけとなった場所だ。ただのアクセサリーであるはずがない。レオンハルトも「魔道具」と言っていることから、確実に彼の被虐趣味に係するモノだろう。

「い、いったいどんな魔道具ですか？」

「これを足につけると男性器が生える。エレノア、初夜というやつをやるう」

「ハアーーーーッッ!!??」

エレノアは混乱した。男性器が??生える?????

この男の発言は毎回エレノアの理解の範疇を優に超えてくるが、それにしたって今回は酷すぎる。

『初夜をやるう』はまだわかる。結婚初日の夜がアレな感じで、その後も清い関係のままだったから、まあわかる。エレノアはこのビックリ

箱のような突拍子の無さを見せる男の、いちおう、妻なので、いつかは体を繋げることになるんだろうなと覚悟はしていた。覚悟はしていたが……

「確認なのですけれど、そのアンクレットはどちらが付けるんですの……？」

「お前に決まっているだろう」

エレノアに決まっているらしい。

「安心しろ。俺の指輪と同じように、この魔道具も『知識』を持ってい

「あの、初夜ということは、その……わ、わたくしが抱かれるのですよね？」

「いや、俺だが」

「俺だが！！！！？？？」

エレノアは絶叫した。そしてそれを『何を当たり前のことを?』という顔で怪訝そうにみるレオンハルト。

そんな目で見ないでくれ。ヴァルガディアの王たちにとっては常識かもしれないが、エレノアの生まれ育った場所では非常識である。

エレノアの命はこの男が握っているのです、エレノアは言うことを聞か

ざるを得ないが、せめてもう少し説明というか、こちら側に歩み寄って欲しい。

「その、わたくしの生まれ育った国では、初夜というのは世継ぎを作ることが目的だとされているのだけれど……レオンハルト様は、あの、子を宿すことはできませんよね……？」

「魔道具を使えばできないことも無いが」

「できないことも無いが!!??」

「なんだ、そんなに驚くことか？」

「ああ……ヴァルガディアは魔術が高度に発展していると聞いていたけれど……そこまでとは……」

「ここの知識と技術がほしいならうちの領になればいいだろう。宣戦布告してやろうか？」

「やめてくださいませ」

あまりのカルチャーショックに頭を抱えるエレノアを見て、「そもそも、この国じゃあ世継ぎを作る意味は無いがな」と呟くレオンハルト。そうだった。ここはバトルロイヤル方式で王が決まるんだった。……後継者問題とは無縁で羨ましい限りである。

うちの国もそうだったら楽だったのに、と祖国の王室のドロドロ具合を思い出して遠い目をするエレノアを、ソファから立ち上がった男がひよいと抱き上げる。

そしてそのままベッドにぼすん、と降ろされたかと思えば、レオンハルトはその場で膝についてエレノアの左足を掴んだ。

「きゃ」

「俺がお前の前で『セックスしたい』と言うなら抱かれる側に決まってるだろ。それに、女を抱きたくなったら他所で抱く」

「セツ、…………理由を聞いても？」

「俺が強者で居続けるために、お前は弱者として俺を痛めつける義務があるから。あと、お前を抱いて中途半端に壊したら面倒だ」

「やっっぱいですわ……」

激ヤバだった。

エレノアはあまりのぶっ飛び具合にドン引いていた。

そしてそんなエレノアを放置して、勝手に左足を引き寄せてはアंकレットを付けようとするレオンハルト。この男、自由すぎる。

レオンハルトは壊れ物に触れるかのように、丁寧な手付きでシルバーのチェーンを扱う。そして、両端に付けられた金具同士がカチリと合わさった、その瞬間。エレノアの頭蓋の内側で何かが蠢いた。

まるで脳を素手で掴まれ、ぐちゃりと掻き混ぜられるような、言葉では形容し難い嫌悪感が背筋を這い上がっていく。エレノアは膨大な量の何かが無理やり脳へ流し込まれていくのを感じた。

きいいん、と耳鳴りがして、全身からドツと汗がふきだす。
エレノアの意識は、己を守るために闇へと沈んだ。

※

「——い、おい」

誰かに肩を掴まれ、強めに揺さぶられる。頭がぐらぐらと揺れる度に頭痛がするのが不快で、止めさせそうとその手を掴んだ。

「意識が戻ったか。俺の時はここまで影響を受けるようなものでは無かったが……」

耳に心地よい低音が鼓膜を震わす。

重たい瞼をなんとか開けてみれば、乙女ゲーの攻略対象みたいな顔の持ち主が心配そうに……いや全然心配してなかった。アリの行列でも見ているような、お手本のような無関心顔がエレノア見つめていた。

「ン、元気そうだな。よし、やるぞ」

「激ヤバですわ……」

エレノアは思い出した。そうだった、自分は目の前の激ヤバ男にちんこ生やす道具付けられてぶっ倒れたんだった。

エレノアはまだ気付いていなかったが、この時魔道具の持つ膨大な量の『記憶』が脳内を暴れ回ったせいで『前世の記憶』が引っぱり出され、エレノアの精神と溶け合い、完全に混ざってしまった。

「どうせ『呪い』が翻訳してくれるから……」とサボりにサボっていたお嬢様口調がさらに崩れ、さらにそこへ現代知識由来の下品な語彙まで混ざったのだから目も当てられない。……幸いなことに、レオンハルトは平民上がりの王様だったので、エレノアの元公爵令嬢としては致命的な言葉遣いに対して「少し口が悪くなったな」としか思わなかった。

「ほ、ほんとにするんですの？」

「ここまでしてやらない理由はないが？ほら、さつさとそれを勃たせろ」
「それ、とは……ウツツワ……無いはずのものが『有り』ますわ……」

…

エレノアの気分は急降下した。

突如として現れた股の間のブツの存在も嫌だったが、それよりも嫌だったのが魔道具から流れてきた『記録』である。

てつきり文字ベースで流れ込むのかと思いきや、『存在しない記憶』を丸ごと植え付けられているのが最悪すぎた。美少年からイケおじまで、

まっったく知らない男達の濡場が臨場感たっぷりに脳内で強制上映されているのだ。

おそらく過去のヴァルガディアの王達だろう。本当にやめてくれ。こんなものを受け継がせるな。全員顔が良いのが唯一の救いだが………虚空を見つめ、植え付けられた「存在しない記憶」を処理していたエレノアだったが、あることに気付いてさらにげんなりした。

「(これ全部『とろあま♡いちやらぶセックス』ですわ——ッ!)」

脳内で強制上映されている映像はどれも常識を疑うようなプレイばかりだが、過激な内容とは裏腹に、交わされる睦言の内容は砂糖を吐き

たくなるほど情熱的で真っ直ぐな愛が溢れるものだったのだ。

エレノアは一端の乙女らしく恋愛モノが好きだった。公爵令嬢だったころはお気に入りロマンス作家がいたし、自室の本棚をロマンス小説でいっぱいにした事もあった。

エレノアは恋愛モノが大好きだ。だが強制的に見せられるゲロ甘な恋人達の情事は別である。

心の準備も無しにいちやらぶ♡汁だくセックスをみせつけられたエレノアは、今の自分たちの状況とのギャップも相まってだんだんムカついてきた。

「こんなに殺伐としているの、わたくし達だけですわ……ッ！」

「なんだ？」

「初夜だというなら、もつと雰囲気を作ってください！？脳内の『記録』と現実の温度差が凄すぎて風邪ひきそうですわ！」

「……？『記録』通りに体を動かせばいいだろ」

「わたくしが貴方に種付けプレスして結腸責めながらキスハメしても良いと！！！！？？？」

「たね……、は？」

「こんな状況で勃つ訳が無くてよ！抱けというならそれ相應の努力をしてくださる！？」

「努力か……」

レオンハルトは腕を組んで「ムム……」と考える。

薄い唇にスッと通った鼻筋。切れ長の目を縁どるたっぷりとしたまつ毛……レオンハルトは世間一般的に見て「整っている」部類に入るだろう。乙女ゲーの表紙の端に居そうな顔だ。堅物な護衛の騎士的な。

しかし中身が残念すぎた。「殺す」と脅してくる男にちんこをおっ立てる奴は居ない。

「はぁ……手っ取り早くエロい雰囲気になる道具とかないかしら……」

「あー……………」

「……まさか」

「『有る』な」

「この国なんでもありますわね……」

『有る』らしい。すごい。あまりにも都合が良すぎるぞヴァルガディア。きつとエロトラップダンジョンもセックスしないと出れない部屋もあるんだろ。うな。きつと。

レオンハルトはサイドチェストの一番上の引き出しに指輪をかざしてから、「たしか結婚祝いでそれらしき物を貰った気が……」等と呟きながら中身を漁っている。

エレノアはもう驚かなかった。レオンハルトが引き出しの中に肩まで突っ込んでいようとも、明らかに棚よりも多きな謎の荷物が出てきても

「まあヴァルガディアだしな……」と穏やかな気持ちで眺めていた。

しばらくそのまましていると、探し物を見つけたらしい男が天蓋のカーテンを全て降ろしてからベッドの上に戻ってきた。例の道具はキャンドル型のようで、天蓋の内側にある小さなサイドテーブルの上でちろちろと小さな火を揺らしていた。すごい。いつ火をつけたのか全くわからなかった。

エレノアは男の早業に関心しながら、ほのかに漂ってきた甘い香りを肺いっぱい吸い込んだ。色気のかけらもないこの空気をはやく何とかしたかった。

※

「……ンッ、♡、ふ、ふ……は……ッ」

鍛え上げられた肉体がシーツの海を泳ぐ。ふたりで寝ても十分に空間が余る程大きなベッドの上で、レオンハルトは楽しげに喘いでいた。

機嫌が良さそうだな、と思いつつながらエレノアは男の逞しい足を割開いた空間に座り込み、熱くぬかるむ穴に突っ込んだ指をぐちゅぐちゅと動かす。腹側の浅い所に触れる度に声が甘くなるのが楽しい。

手っ取り早くエロい雰囲気になるキャンドルとエレノアに混じった

現代知識のおかげで、思ったよりこの行為に不快感は無かった。むしろ、普段偉そうにしてる男が尻穴を弄られて嬌声をこぼす様は気分がいい。存外、エレノアはこの状況を楽しんでいた。

「ふーッ♡、ふ……、あゝ♡」

だらだらと透明な蜜を零す先端を、ぐちゅりと握り込めばビクンと腰が跳ねた。目の前のグロテスクなソレは、エレノアの前ではただ揺れるだけのむき出しの性感帯だ。そう思うと、とたんに可愛らしく見えてくる。

急所を守るように、無意識に閉じ気味になっていた太ももを咎めるよ

うにピシヤリと叩けば、再びおずおずと開かれた。

腹の中のしこりを潰しながら親指で鈴口を撫でれば、「うあゝ♡」と恍惚の声を上げる。どれ程の時間弄り続けていたか忘れたが、初めと比べて随分良い反応をするようになった。

「は、あ♡……エレノア、」

「……、」

突然名前を呼ばれる。声の方へと顔を向ければ、眉尻を下げて恍惚とした表情を浮かべる男がいた。

ぎゅ♡、ぎゅ♡と前立腺を押し込めば、英雄像を思わせる均整の取れた

肉体を震わせて、「ぐ、う♡、ツク♡」と愉しげに口元を歪ませる。まるで音の出るおもちゃみたいだ。エレノアは思わず口元を緩めた。

「あッ、は……、はやく、エレノア」

「……ええ」

ちゅぷ♡、ちゅぷ♡と急かすように指が食い締められる。まとめて入っていた指を広げれば、とろとろにほぐれた肉がくぱ♡、と広がった。はじめて指を入れた時と比べると十分に柔らかくなっていると思えた。「抱け」と迫ってきたのだからとづくに準備は済ませているだろうと思っていたのに、洗浄だけして後は丸投げだったのは本当に頭にきた。

いくら『知識』があるとはいえ、アナルはガチガチに閉じきっているし男の足が重すぎて弄りやすい体勢にするのは重労働だったし……本当に、ほんつとうに大変だった。

エレノアがあまりにも非力だったので（普通の令嬢は男性の足を持ち上げない）ダメ元でどうかしてくれと訴えたら身体強化の術をかけてくれた。ラッキー。言ってみるものである。

ずる、と指を引き抜いて、とつくにガチガチになっている性器をとります。先端を穴にくつつければ、ちゅぷ♡、ちゅ♡、と控えめにキスをされた。……未知の感覚が背筋を駆け抜け、腰の奥がじわりと熱を帯びる。エレノアはもっとそれが欲しくて、ずちゅん♡、と一気に性器を

突き入れた。

「は、あゝあ……………ッッ」

「っふー……………」

丹念にほぐした柔らかな肉が性器全体を包み込むのが気持ちいい。レオンハルトも性器を我慢汁でびしゃびしゃにしながら気持ちよさそうに悶えている。

レオンハルトはまだ尻だけでは達せないため、快楽を発散できないこの状況は相当キツイ筈だが、きつとそのキツさすら気持ちいいのだから。この男、無敵すぎる。

ちゅば♡、ちゅぶ♡と媚びるように吸い付く肉筒の感触をじっと味わっている、いつのまにか男が快感から逃げるように身を振っているのが見えた。

そんな男の腰をぐっと掴み、どちゅ♡、と逃げた分だけ突き入れる。

「うゎッ、は、あー……」

「気持ちよさそうにしてるのに、まだイけないのね……」

「ン、♡……さっきのところの方が、イイ」

「前立腺？」

「良くわからんが、ッ、浅いところだ」

男の言う通り、行き止まりを目指すように動かしていた腰を引いて、腹側のしこりに先端が当たるように、ちゅこ♡、ちゅこ♡と浅く抜き差しをしてやれば、男は眉間にぎゅうつと皺を寄せては甘ったるい息を吐いた。

「ここ？」

「あ♡、ははッ、は、なかなか、いいぞ……おニッ♡」

「ふふ、ほんと？……わたくしも、気持ちいいわ」

腰を動かすたびに快樂が溜まっていく。

全身をじつとりと汗で濡らしたレオンハルトと目が合ったかと思えば、「もっと」と掠れた声でおねだりされた。

さらなる快感がお望みか、とずっと放置されていた熱く腫れきった性器を根元からず……ツちゅ、と搾り上げるように数回扱けば「は、あ……ッ♡」と声をあげて、重たそうな精液をドプツと吐き出した。

どろついた白いそれが、鍛え上げられた腹筋を汚し、男が呼吸する度に汗と混じりあって薄まっていくのを、エレノアはじいっと見つめる。今日初めての射精を終えて「は、は、」と浅く呼吸するレオンハルトの、目を閉じてうっとり余韻に浸るその姿はどこか無垢で、遊び疲れて眠る子供のような、健康的な美しさすらあった。

……腹の底が熱い。

エレノアはくたりと柔くなった性器から手を離し、レオンハルトの膝裏に手を入れる。

「ん、ぐッ……♡？」

そしてそのまま前へぐっと押し倒して突き入れれば、男のきよとんとした間抜けな顔が良く見えた。

普段は鋭い眼光が、今はすっかりなりを潜めてしまっている。困惑からか、先程よりも開かれた緋色の瞳はたつぷりと潤っていて、今にも雫がこぼれ落ちそうだ。

とちゅん♡と行き止まりをノックするなびに、はふ♡、はふ♡と甘く

吐息をもらす薄い唇。その奥から真っ赤な舌がチロリとのぞくのが酷く色っぽかった。

「ね、わたくしがいくまで付き合ってくださいさる？」

そう言うとき男は「ははッ、」と笑いながら、シーツに投げ出していた腕をエレノアの首にまわす。

「……大歓迎だ」

そう囁いた彼があまりにも可愛くて、気付けばエレノアは、目の前の唇

に噛み付くようなキスをした。

このキスが、エレノアのファーストキスだった。

※

「尻だけでイけるようになると相当イイらしい」

その言葉で、慣れないことをした疲労でうとうととしていたエレノアの意識が一気に引き戻された。

全てが終わったあと特に会話があるでもなく、無言でどこからか取り出した本を読んでいた男が初めて発した言葉がこれである。普段の態度がアレな男だったので、エレノアはこの男にピロートークは期待していなかったが、こんな始まりなら無言の方が遥かにマシだった。

裸のままエレノアを片腕で抱きかかえながら、片手で本を読んでいたレオンハルトが続ける。

「開発しないといけないのは面倒だが、男も胸でヨくなれるらしいな」
「……つまり、何が言いたいんですの？」

「エレノアは筋がいい。知識だけあっても実際に行動に移せるかは別だから……お前は物理的に痛めつけるのは全くだめだがコツチの才能

はある。ここに書かれてることを一通りやろう」

「……もしやその本は」

「先代の王の記録だ」

「やっぱり……！」

エレノアに植え付けられた記憶の文字媒体バージョンである。というかこの男、自分が抱かれた後に他人のアナルセックスのレポを読んでいるのか。やはりイカれている。

「ほら、お前も見ろんだ。今なら特別に何から取りかかるか選ばせてやるから」

「嬉しくないですわ……」

ぎゅむ、とレオンハルトの胸元に抱き寄せられて本の中身を見せられるエレノア。未だにしつとりと汗ばんだ男の素肌がむにゅ、と触れて変な気分になる。体温で温められた匂いが情事を連想させて、エレノアは慌てて文字列に集中した。……好きに選べと言われたが、正直エレノアはなんでも良かった。どうせ最終的に全部することになるので。

【数年後のふたり・上】

「ぐッ♡、ン、ううゝ……ッ」

目の前が点滅する。尻が勝手に中の異物を食い締める度にイイトコロに当たって、激しい快感がぐるぐると腹に溜まる。ふる、と情なく震えるだけの性器は既に白濁に塗れていて、男が既に何回も射精したことを物語っていた。

ナカの感覚に悶えるレオンハルトの背後から細い腕がにゅつと出てきて、ビクビクと痙攣する男の腹を慈しむように撫でる。

「国でいちばん強くても、お腹の中は弱いのね」

「はーッ♡、は、あッ♡♡、あッ、」

「あんなにちいさな玩具」つでこんなになっちゃうなんて……少し妬けるわ」

「あゝ、そこッ、お♡♡、あたってる♡♡」

ぐっ、ぐっ、ぐうッ♡と、女が腹を押し込む度に、レオンハルトは陸に上がった魚のようにびくびくっとな体をねさせた。

レオンハルトの肩口から女——エレノアがひょいと顔をだす。男の口の端からっう、と垂れた唾液をぺろりと舐めとってから、ちゅ、ちゅ、と頬にキスを送る。

急に口が寂しくなつて強請るように女の方へ顔を向ければ、女はふふ、と小さく笑つてから唇を合わせてくれる。

女の、雲ひとつない空を閉じ込めたような瞳を見つめながら、男は己の妻と出会った日の事を思い出した。

※

エレノアは、ほぼ生贄としてレオンハルトの元へ嫁いできた。レオンハルトが指名した訳ではない。宣戦布告しようと思っていた国から「何でもするからウチに攻め込むのは止めてくれ」と言われたので、「なら金と技術と女をくれ」と言って送られてきた女がエレノアだった。

当時のレオンハルトは既に被虐趣味を開花させていたので、なるべく気が強い、いじめるのが得意そうな女が良いなどと言った記憶がある。

王太子の友人の殺人未遂と国家転覆未遂をやつてのけた大層な悪女が来ると聞いて楽しみにしていたレオンハルトだったが、そんな気持ちには直ぐに打ち砕かれた。

なぜならば、婚礼の場に訪れたのは暗い顔をしたなんとも弱々しそうな女だったからだ。国に突き返そうか迷ったが、顔が好みだったので「観賞用にはなるか」と思つてやめた。本当に最低である。

レオンハルトはガツカリした。顔は確かにレオンハルト好みの気の強そうな感じだったが、まとう雰囲気といい所作といい、余命いくばくもない病人のような女相手では、きつとレオンハルトの望みは叶わないだろう。

鞭を渡して「俺をぶつてみる」と言ったらか細い悲鳴をあげて失神し
そうである。

レオンハルトは「ああ、運が無いな」と投げやりな気持ちで婚礼の義を
終わらせ、花嫁との会話も無しに執務室へ籠った。

王になったとはいえ、レオンハルトは今までもろくに勉強してこなかっ
た憲兵あがりの元平民なので、長時間机に向かうこと自体が苦痛だった
が、病人みたいなひよろ長い女と会話するよりかはマシに思えた。

執務室に籠ってからどれ位の時間が経っただろう。側近が「結婚初日
くらいちゃんと会話しろ」とせつつくので、しぶしぶ女の居る寝室へと
向かった。

女は突然入室してきたレオンハルトを見て、ティーカップを持ったまま固まっていた。

レオンハルトが口を開く度に縮こまる、食われるだけの小動物のような、そんな様子の女を見て失望だけが溜まっていく。

今からでも結婚を無かった事にできないか、と至極最低な事を頭の片隅で考えながら、レオンハルトはダメ元で鞭を渡して「俺をぶってみろ」と脅してみた。本当に最低である。元平民だからとか教養がないから等は一切関係なく、人間として致命的に最悪だった。

しかし女——エレノアは、「良くて泣き出すか、最悪失神するかな」と考

えていたレオンハルトの予想を軽々越えてきた。

「イカれてますわーーーーーッッ！！！！」

空気そのものを震わせるような絶叫が寝室に響き渡る。かと思えば、堰を切ったように文句が次から次へと飛び出してきた。

「『この鞭で俺をぶってしろ。できないなら殺す』！？バイオレンス・オア・デッドですわ！！『俺をぶってしろ』と『殺す』の単語が共存することってありますの！！！？？」

「なんだ、嫌か？なら殺そうか」

「『なら殺そうか』……？？わたくしどの立場で鞭を振るえばよろしいんですの！！？？殺さないでと怯え泣きながら『できないなら殺す』と脅す加害者に鞭をふるえと！！？？」

「その場合の加害者はお前だな」

「わたくしが加害者ですわ………ッ……ッ！！！」

「はは、」

レオンハルトから自然と笑みが零れた。いじめっ子がするような邪悪な笑みだったが、エレノアは「イカレ野郎ですわ……」と心底引いた様子で呟いていた。女からははや一欠片の恐怖も無く、あるのはただ困惑と、ひとつまみほどの男への怒りだった。レオンハルトの口元が愉しげ

に歪む。

その後も良かった。レオンハルトの要求に答えようとうんうん悩むエレノアを見て、男の心臓がどくどくと激しく脈打った。

——この女だ。きつとこの女が、俺の望みを叶えてくれる。

その日のレオンハルトは、熱に浮かされたような心地で寢室を後にしたのだった。

※

「ンニ♡♡、ふ、あニ♡♡、ちゅ」

「ふふ……」

自分よりも薄い舌でちゅくちゅくと口内を荒らされる。あの日見た病人のような女は存在せず、妖しく咲き誇り、レオンハルトを惑わせては墮落へ導く毒花のような女がここに居た。

初めは己が強くあるために痛みを求めたが、今では胎の中を蹴られ、脳みそまで快楽に浸かりながら愛でられる事を求めてしまう。先代の王達が、この甘美な行為にハマったのも頷ける。

重圧から解放され、無防備になったところをただひたすらに甘やかさ

れるこの時間は、既にレオンハルトにとって手放せないものになった。
た。

「……ン♡！？うゝ……ッ！！」

「量が少なくなってきたわね……空っぽになったら挿れてあげるから、
もう少し頑張れる？」

突然、胸のところがぎゅうッ♡、と潰され、レオンハルトはどぶ、と
ぷ、と精液を漏らした。

すっかり開発されてぷくりと腫れた乳頭をこねられながら耳元で囁
かれて、脳の奥がジンと痺れる。さらなる快楽を得ようと胎内が玩具を

ぎゅう♡と締め付けて、突起が前立腺と会陰を刺激した。

「ああ……ッ♡♡、は、いったッ♡、あ♡、いった、あッ♡♡」

「よく出来たわね、レオン♡」

レオンハルトの性器から、とぷ、と弱々しく白濁が吐き出された後、鈴口がはくはくと苦しそうに開閉する。それを見たエレノアが、唾液に濡れた男の唇に労るようにキスをして、ちゅぷん♡、と胎の中の玩具——エネマグラを抜き取った。

名残惜しげにひくつく後孔の、ぷくりとしたふちを指の腹で宥める。そして空っぽになったタマをくちゅ♡、ぐちゅ♡と揉み込んでやれば、

弱々しい嬌声が男の喉奥からとびだした。

「ごめんなさい、レオン。全部空っぽにできたからご褒美に挿れてあげたいけれど、疲れちゃって……」

「ン……♡、謝るな……俺が動けば問題ないだろう？」

「ほんとう？うれしいわ……ありがとう」

イきたてで力の入らない足を無理やり動かして、レオンハルトは背後に座り込むエレノアの膝の上に乗る。

向かい合わせになるように座ると、子種を出し切ってふにやりと脱力している男のモノと反り返る程ガチガチに勃起あがった女のモノが触

れ合う。ぴちゃ、と男の性器から垂れた白濁が女を汚した。

エレノアは僅かに震える男の腰に手を添えて、とびきり優しく声をかける。

「大丈夫？ひとりでできる？」

「舐めるなよ……俺はこの国の王だぞ」

そう言ってレオンハルトは女の剛直に手を添え、モノ欲しげにヒクつく後孔に先端をぴと♡、とくつつけた。

男の尻穴が待ちきれない、と言ったように先っぽをちゅぷ♡、ちゅぷ♡と食む。

「ふーッ♡、ふーッ♡」と、これから来る快感を期待して荒くなってしまう息をなんとか整えて、ずぶぶ……ッ♡と挿入する。前立腺をぎゅう♡と潰された衝撃でカク、と脱力するのをを何とか堪える。

「ふッ、う♡、は♡、は……ッ♡」

「わ、上手ね……」

ずっ♡、ずぶっ♡、ぬちゅ♡と少しづつ腰を落としていき、レオンハルトはでっぷりとした性器を胎におさめていく。先端がこちゅん♡と最も奥をノックしたところで動きを止める。男の腸壁が待ち望んだ剛直を歓迎するようにぐねぐねとうねった。

先程まで小さな玩具をしゃぶっていた胎が、愛しい妻のペニスにぐう
う……ッ♡と押し広げられて甘くイク。

は♡、は♡、と浅く呼吸をしながら、どうだ、できたぞと言わんばかりにエレノアの顔を見れば「ご苦労さま」と労われて唇をぺろ、と舐められた。……物足りなくて、れ、と舌を出せば「うふふ、」と笑われて華奢な指に摘まれる。

「わたくし、貴方の舌が好きよ。分厚くって、赤くて、敏感で……」

「あ♡、へれ、♡おあ……ッ♡♡」

「舌をさりさりされるのも好きだけど、上顎を擦られるのも好きよね」

「あおッ♡、お、っ」

「ふふふ、かーわい……♡」

舌の表面をさりさり♡、と撫でられたあと、口の中に指を突っ込まれて上顎をくすぐられる。興奮のせいで粘度の高くなった唾液が、細く形のいい指を通して滴り落ちた。

上顎からピリピリとした弱い快感がやってきて、ただでさえ危うい理性を緩やかに溶かしてくる。

思わず脱力した、その瞬間。

「お"……ッ♡♡」

とちゅ♡と胎の行き止まりに先端が押し付けられて、慌てて足に力を
いれた。

「レオンはおくちも弱くてかわいいわね。気持ちよすぎてねむたくなっ
ちやったかしら？」

「ひあ、♡、ひあう……♡♡」

「そう？じゃあきつとわたくしの勘違いね……んー、それなら、お腹の
奥が寂しくなっちゃった？」

「う、あ、ああ……ッ！？♡」

ぐううう……ッ♡と腰を押し付けられて、最奥をゆつつくりとこね

られる。とち♡とち♡と優しくノックされる度に胎の奥の場所が柔らかくなって、奥の襞が吸い付くように動いた。

ここを貫かれると一気に駄目になる。まだ甘いぬるま湯のような快楽に浸っていたくて、レオンハルトは一生懸命に腰を浮かせた。

「わ、動いてくれるの？うれしいわ」

「あ♡、ふ……♡、とうぜん、だ」

すり♡と上顎を撫でられて、エレノアの手が口内から出ていく。男はまだ胎で妻のペニスをゆるやかにしゃぶっていたかったが、愛する妻にそう言われては奉仕するしかなかった。

開きっぱなしだったせいで力の入りづらい口をなんとか動かして、返事をする。……その後で、レオンハルトの唾液に塗れた妻の手をとり、ねとついた液体を舐めとる為に舌を這わせた。

時に甘やかし、時にいじめてくれる指先から始まり、指の股、手のひら……といった順に、妻から褒められた舌をすべらせる。全て舐めとった後、仕上げにちゅ、と手の甲に唇を落とせば、男の額に一瞬柔らかな感触がして、それからわしゃわしゃと頭をかき混ぜられた。

くふくふと楽しい笑い声が聞こえる。多幸感がぶわりと広がって、胎の奥がきゅん♡、と疼いた。